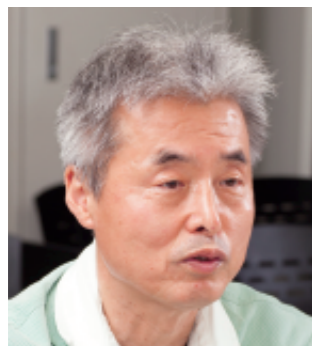


論考●特集・宇宙

宗教と宇宙

鎌田東二（こころの未来研究センター教授）
Toji KAMATA



1951年徳島県阿南市生まれ。1980年國學院大學大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学。武蔵丘短期大学健康生活科助教授、国際日本文化研究センター客員助教授、京都造形芸術大学芸術学部教授などを経て、2008年より現職。筑波大学文学博士。言霊思想、聖地論、神仏習合思想、翁童論、靈性思想などの研究をベースに人間の可能性と不可能性を探究している。著書に『翁童論——子どもと老人の精神誌』（新曜社）、『聖トポロジー——意識と場所Ⅰ』（河出書房新社）、『超訳 古事記』（ミシマ社）、『神と仏の出逢う国』（角川学芸出版）、『歌と宗教——歌うこと。そして祈ること』（ポプラ社）、編著に『モノ学の冒険』（創元社）、五木寛之との対談『霊の発見』（平凡社）、企画・編著『講座スピリチュアル学 第1巻 スピリチュアルケア』『同 第2巻 スピリチュアルティと医療・健康』（ピング・ネット・プレス）など多数。

「宇宙」という語と宇宙起源神話

「宇宙」という漢語は空間と時間を表わすとされる。古くは、紀元前2世紀に編纂された『淮南子』巻十一「齊俗訓」に、「往古来今謂之宙、四方上下謂之宇」とある。「往古来今、これを宙と謂う。四方上下、これを宇と謂う」つまり、「宇」は「四方上

下」の空間、「宙」は「往古来今」すなわち過去現在の時間を意味する。

実は、この『淮南子』の「宇宙」論は古代日本の宇宙論にも大変大きな影響を与えた。たとえば、『日本書紀』の冒頭の一文、「古、天地未だ割れず、陰陽分れざりしとき、渾沌たること鶏子の如く、溟滓りて牙を含めり。其の清み陽なる者は、薄靡きて天と為り、重く濁れる者は、淹滞きて地と為る」とあるのは、間違いなく、『淮南子』巻二「俶真訓」にある「天地未だ割れず、陰陽未だ判れず、四時未だ分れず、万物未だ生ぜず」を範にしている。この『淮南子』の記述は、「天地・陰陽、四時・万物」と概念構成がきわめて明確で論理的である。それに対して、『日本書紀』の方は、「鶏の子」とか「牙」とか、非常に具体的かつ即物的で比喩的で、同じような「天地開闢」神話でもアクセントの置き方や語り口がずいぶん違っている。同じ素材を使っても、料理の仕方が違う、加工法が違う、盛りつけ方が違う。いろいろな違いやヴァリエーションを作り出すことができる。

今は、天文学や宇宙物理学の進展で、137億年前にビッグバンが起こってこの「宇宙」が始まり、インフレーションにより膨張してきたとされているが、古来、天空を見上げて想像力の翼を広げてきた人類は、「天地開闢」にせよ「天地創造」にせよ、世界の始まりについてさまざま神話的思考を凝らしてきた。『淮南子』はそうした人類史的想像力の重要な展開を記録している汲めども尽きぬ泉の1つである。

月本昭男『古代メソポタミアの神話と儀礼』（岩波書店、2010年）によ

ると、世界の始まりを説く「創世神話」類型には、①宇宙起源神話、②人類起源神話、③文化起源神話があるという。宇宙がどのようにして始まったのか、そしてその宇宙の中でわれわれ人類（人間）はどのようにして誕生したのか、そしていかにして火や道具や言語などを用いる文化的生存様式を獲得するようになったのか、その「謎」を神話的物語として言い伝えてきたのである。

その「宇宙起源神話」では、宇宙の秩序基本は「天と地」とされ、①天地分離、②天地交合、③天地創造の3類型があるという。最初に一塊であった「天と地」が分かれていくのか、それとも別々であったものが交わるのか、超越的な一者の神が創造するのか、さまざまな起源神話類型があるというのだ。人類の想像力も豊かといえば豊かであるが、パターン化されているともいえる。

そのような神話類型の中で、『淮南子』「俶真訓」や『日本書紀』本文の「宇宙起源神話」はいうまでもなく「天地分離」類型になる。『日本書紀』では、「いにしえには、まだ『天と地』が分離されておらず、陰陽も分かれていなかった。その渾沌としていたさまはまるで鶏の卵のようであったが、いつしか昏くくぐもっている中に胎動の兆しが生まれ、澄明で輝いているものがたなびき広がって天となり、重く濁ったものが滞留して大地が生まれた」と記す。鶏の卵のようなところから細胞分裂するように世界が発出したと。

宇宙宗教の展開
～弘法大師空海の事例から

さて、19世紀末に初めて「宗教学」

を近代的学問として提起したマックス・ミュラー（Friedrich Max Müller, 1823-1900）は、「宗教（religion）」を「無限なるものを認知する心」と定義したが、この「無限なるものを認知する心」を最大限に働かせた最初の日本人は空海（774-835）であったと思う。

空海は讃岐国（香川県）善通寺に生まれたとされるが、18歳で大学に入ったものの、1年余りで中退し、「自然智宗」に触れ、吉野や四国の山中に籠って「虚空蔵求聞持法」の修行に明け暮れた。阿波国（徳島県）の太龍寺（四国八十八ヶ所第21番札所）や土佐国（高知県）室戸岬の御厨人窟（御蔵洞、第24番札所最御崎寺）において、「ノウボウアキャシャギャラバヤオンアリキャマリポリソワカ」という虚空蔵菩薩の真言を百日間で百万遍唱える修行を行ったときのようすを、自ら『三教指帰』に、「阿国大瀧嶽の躋り攀ぢ、土州室戸崎に勤念す。谷響を惜しまず、明星来影す」と記している。

この「虚空蔵求聞持法」とは、サンسكريット語で「アカシャー」と呼ばれる「虚空」、すなわち広大な宇宙のような無限にして無尽蔵の知恵と慈悲を持つ虚空蔵菩薩（Ākaśagarbha）の法力を授かる密教の修法である。これを修すると、超絶記憶力が身につくとされている。あらゆる経典を一読しただけで記憶し、理解し、しかも忘れることがないという。受験生が皆こぞって大喜びするような修行法ではないか。

大学の勉強を投げ捨てて、おそらく「空海」と名乗る前の空海は、この修行法に入れ込んだ。その甲斐あって、「明星来影」、すなわち、虚空蔵菩薩を象徴する「明星＝金星」が飛来した。それが後世の弘法大師伝説になると、さらに神祕化されて、金星が空海の口中に入ったことになっている。それは、虚空蔵菩薩と一体化したことの象徴である。つまり、空海は最初に「金星化」した日本人



弘法大師空海像（重要文化財、西新井大師總持寺蔵）

だったというわけだ。「空海」という名前そのものが、実に宇宙的ではないか。

その空海が唐に渡って、青龍寺の恵果阿闍梨から密教を伝法して「真言宗第八祖」として帰国し、日本に真言密教を伝え、東寺と高野山をその修法と修行の拠点とし道場とした。東寺の講堂にも高野山金剛峯寺の根本大塔にも空海伝授の「曼荼羅」が伝えられてある。

曼荼羅には胎蔵曼荼羅と金剛界曼荼羅の2種があり、この2つをあわせて両界（両部）曼荼羅といい、前者は女性原理と理を、後者は男性原理と智を表わすとされる。この曼荼羅の中心尊格は真言密教の教主の「大日如来（mahaavairocana）」であるが、この如来が宇宙根源神的一者なのである。



室戸岬の御厨人窟

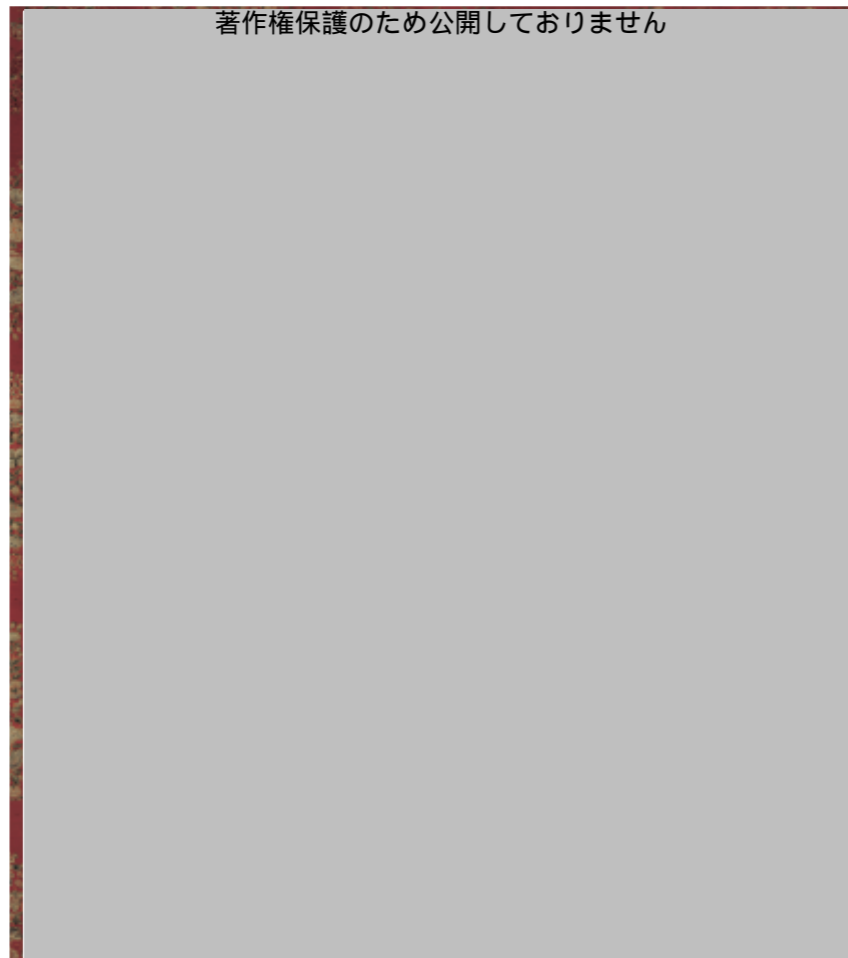
空海はこの虚空蔵菩薩や大日如来という“宇宙尊格”からのインスピレーションとメッセージと法力を得て、超人的な活動を展開した。「即身成仏」を体現した密教修法家として、神秘不可思議なる変幻自在の書体を駆使する書家として、美文の修辭に長けた詩人として、広大な曼荼羅の哲学者・美術家として、満濃池や益田池などをつくる巨大プロジェクトを推進した土木事業家として。「満濃」ならぬ「万能」の土として文字

どおり八面六臂の活躍をしたのである。おそらく、日本の宗教史も文学史も美術史・芸術史も、弘法大師空海がいなければまったく異なったものになっていたに違いない。それほどに広大な「虚空蔵」的な影響を与えたのが空海であった。

興味深いことに、神秘家空海は、外宇宙と内宇宙の相即を体験し、それを解き明かした。外宇宙が両界曼荼羅として可視化されたとすれば、内宇宙は「十住心」哲学として分析された。空海は『般若心経秘鍵』において、「それ仏法、遙かにあらず。心中にしてすなはち近し。真如、外にあらず、身を捨てて何んか求めん。迷悟、我に在れば、すなはち発心すれば、すなはち到る」と説いている。すべては「心」の中にあるのだ。もちろん、仏法の真理も。だから、外なる権威や権力を求めるのではなく、内なる真理、「真如」を求めるのだ。それゆえ、「発心」し、十段階の「心」の階梯を旅し、仏心＝仏身に到るのだ。

空海は、「如実知自心」という一言で、仏道探究を表わした。その「自心」には、意識の迷悟と浅深があり、『秘密曼荼羅十住心論』と『秘藏宝鑰』ではそれを「第一抵羊心」から「第十秘密莊嚴心」までの意識の階梯として示す。「心」の状態とレベルこそが存在の状態の現われを変化させる媒体である。その「心」の状態を瞬時にして変化せしめるのは言葉＝真言であり、音・響きであり、文字である。「真言宗」と名乗るゆえんである。そこで、「心」の変容こそがすべての鍵（「秘藏宝鑰」）になる。

そのことを、真言哲学の書『声字実相義』では、「五大にみな響あり／十界に言語を具す／六塵ことごとく文字なり／法身はこれ実相なり」という詩（頌）で表わした。宇宙を構成する地水火風空の「五大」の要素はみな音響を発しており、地獄界から餓鬼・畜生・修羅・人・天・声聞・縁覚・菩薩を経て仏界に至るまで



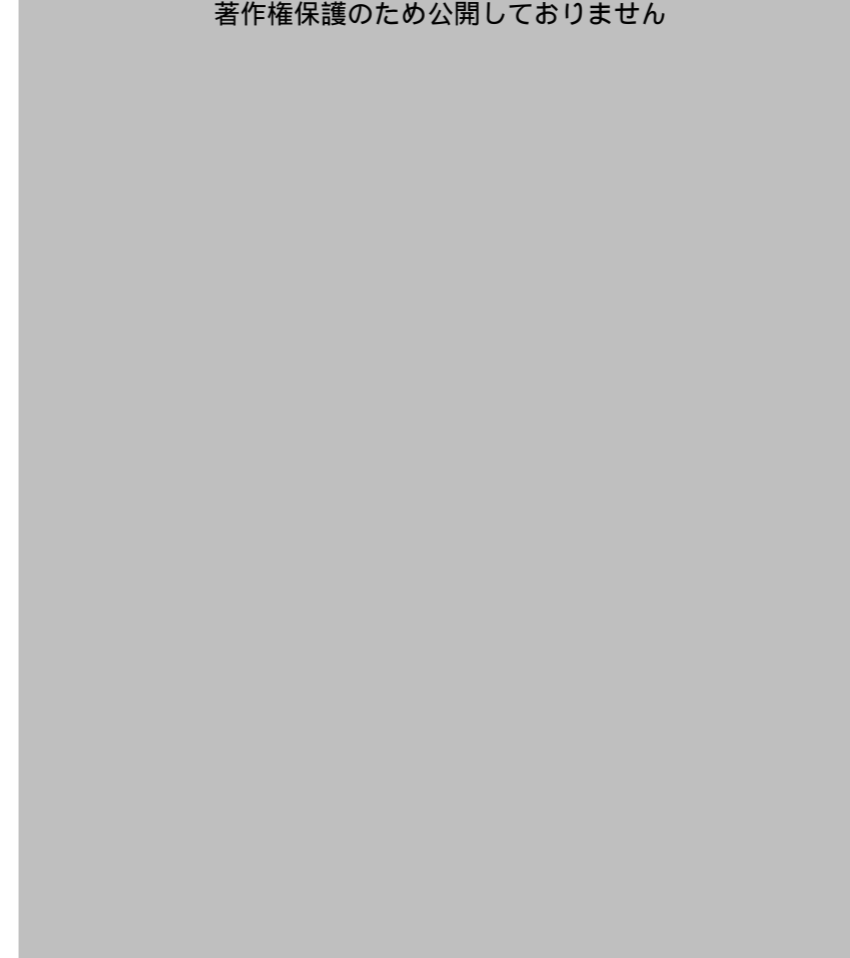
両界曼荼羅図 胎藏曼荼羅 (国宝、東寺蔵)

の「十界」には響き＝声から起こった十種の「言語」がある。しかし、仏界を除く九界の言語は妄語で、仏界の言語のみが真実語（秘密語）である。加えて、色聴香味触法の「六塵」の文字もすべて根源的存在である法身大日如来の姿の流出である。汝の「心」がその「心」の「実相」を覚るかどうかが問題なのだ。

人はみなその「自心」の本性の秘密莊嚴を如実に知ることができればそのまま即身において成仏できるのであるが、しかしながらまことに残念なことに、衆生はその秘密を悟らずに惑い苦しんでいる。そこで、「三密加持」という修法によって神秘的な融合（unio mystica）を経て、迷える衆生と悟れる如来の秘密が「入我我入」し、相同し、融合することによって「即身成仏」の道が啓かれると説く。「如来の大悲と衆生の信心とを表す。仏日の影、衆生の心水に現ざるを加といひ、行者の心水、よく仏

日に感ずるを持と名づく。行者もし能くこの理趣を観念すれば、三密相応するが故に、現身に速疾に本有の三身を顕現し証得す」と。いわゆる「加持祈祷」の「加持」とは、大日如来の光が衆生＝行者の心に映じるさまに感応してその本質的「理趣」を「観念」すれば「三密相応」して「現身」にすぐさま法身・報身・応身という「本有の三身」を顕現・体得・証明することを指す。これがすなわち「即身成仏」だというのである。

空海は、『秘藏宝鑰』の序詩を「悠悠たり、悠悠たり、太だ悠悠たり、／内外の縑細千万の軸あり。／杳杳たり、杳杳たり、甚だ杳杳たり、／道をいひ、道をいふに、百種の道あり」と始め、「生れ生れ生れ生れて生の始めに暗く、死に死に死に死んで死の終りに冥し」と、生死の迷いと狂いの流れの中に秘密曼荼羅世界が内在し、また顕在することを解き明かし、『秘密金剛は最勝の真なり』



両界曼荼羅図 金剛界曼荼羅 (国宝、東寺蔵)

とは、この一句は真言乗教の諸乗に超えて究境真実なることを示す」とその書を結んでいる。これが、存在世界の実相という「秘密の宝」を開ける「鍵」、つまり「秘藏宝鑰」というわけである。

岡潔の金星体験と鞍馬山の金星神話 ～近代史の金星伝承

さて、空海は日本最初の「金星化」した「宇宙飛行士」であるとわたしは思っているが、次に特筆すべきなのが岡潔（1901-1978）である。数学研究者の森田真生氏の教示によると、岡潔は、『春雨の曲』第7稿で、「よく晴れた夜、わたしは家の後ろの小高い丘の斜面に、北西の方を向いて、笹原に背をもたせかけたまま、金星から来た娘の話を聞いていた。／娘はわたしの今生の越し方行く末を詳しく説明してくれたのであるが、わたしには夢の中の話のよう

であった。／満天の星斗も水上に乱れ飛ぶ蛍のように見えた」という「金星少女との邂逅」体験を記している。

この「金星から来た娘」が岡潔の「今生の越し方行く末を詳しく説明してくれた」とは、いかなる「説明」であったのか？ 空海の「明星来影」体験に比すべき事態であった。広島文理科大学助教授を務めていた1936年6月23日の夜のことであった。この「金星少女との邂逅」を精神病的な妄想体験と見るか、空海が体験したような密教的な神秘体験と見るかで理解と評価が大きく異なってくるが、似たような体験を持つわたしはこれを空海的な密教体験と同種のものとする。それはしかし、同時に一種の「創造の病」でもあって、この世のコードに変換するにはいくつかの手順や作業が必要となる。岡潔は、晩年に、同志社女子大学の女子大生となっていた「金星少女」と「再会」することになるが、これまた理解と



鞍馬寺を取り上げたJR東海の京都CPポスター (1998年、JR東海提供)

評価が大きく分かれるところであろう。「奇人変人」の「天才数学者」として話題になった岡潔の人生において、知恵と慈悲の体現者の虚空蔵（虚空菩薩）的な「金星少女」の登場は、必然であり、象徴的な意味を持っているといえる。

もう1つ、金星伝承として特筆すべきものがある。鞍馬山の金星伝承である。拙著『場所の記憶』（岩波書店、1990年）で詳しく論じたことがあるが、鞍馬山の本尊の一尊とされる「魔王尊」は650万年前に「金星」から地球に降り立った「サナート・クマラ」であるという。その年齢は16歳のまま、年をとることのない永遠の存在で、地球進化を司っているという。鞍馬山の本尊の三尊「毘沙門天・千手観世音・魔王尊」はそれぞれ「太陽・月・地球」と「光・愛・力」を象徴する存在とされるが、ここには近代「神智学」の影響が見られる。それにしても、この650万年前に金星から降り立った神秘不可思議なるモノがJR東海のポスター広告で新幹線に貼られていたのを見たとき、心底驚きながらも、面白い世の中になったものだと感じたものである。

かくも、「宇宙」は広大で、神秘不可思議で、遠くにもあるが、すぐ近くの「心」の中にも「鞍馬山」にもあるのである。